

IB教育による「言語能力を構成する資質・能力」育成の可能性と課題：DP言語Aの概念理解に着目して

田中，佳太
開智中学・高等学校：教諭

<https://doi.org/10.15017/5068317>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 24, pp.21-28, 2022-09-30. Seminar of Educational Sociology, Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

IB 教育による「言語能力を構成する資質・能力」育成の可能性と課題 —DP 言語 A の概念理解に着目して—

Possibilities and challenges of fostering Japanese language development competencies
: A focus on Conceptual Understanding in DP Language A

田中 佳太

1. はじめに

2017・18 年（平成 29・30 年）告示学習指導要領（以下、新学習指導要領）では国語科に全ての学習の基盤となる資質・能力である言語能力の育成が期待されている（文部科学省，2018a）。資質・能力の育成に向けては教科のなかのキー・コンセプト（=key concepts：鍵となる概念）やビッグ・アイディア（=big idea：重要概念）を取り入れていくことが考えられる（白井，2020）。新学習指導要領においても知識を概念的に理解する教育が求められている（文部科学省，2018b）。

そこで本稿では資質・能力を育成するために概念を重視する教育実践例として国際バカロレア

（International Baccalaureate：以下、IB）教育を取り上げ、IB 教育が言語能力の育成に寄与する可能性と課題を論じる。

ここで IB 教育とは何かについて説明する。IB 教育とは国際バカロレア機構（International Baccalaureate Organization：以下、IBO）が提供する国際的な教育プログラムである。このプログラムは世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせることを目的として 1968 年に開始され、2022 年 7 月現在、世界 159 以上の国・地域、約 5,500 校において実施されている。日本でも IB 教育を実施する学校は近年増加する傾向にある（文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム，2022）。

IB 教育に関する特徴の一つは概念を用いた探究学習である（大迫，2016）。IB 教育には学習者の年齢や目的

に応じて、PYP（Primary Years Programme）、MYP（Middle Years Programme）、DP（Diploma Programme）、CP（Career related Programme）の四つのプログラムがあるが、その全てのプログラムで「概念理解に重点を置いた指導」を行うことが求められている。また PYP では 7 つの「基本概念」が、MYP では 16 の「重要概念」と教科ごとに扱うべき「関連概念」が、そして DP の一部の教科でもカリキュラムで使用が推奨される概念が明示されている。

このように IB 教育では概念を重視する指導が実施され、概念を重視する教育の典型例としても取り上げられている（中村，2019；白井，2020）。そこで本稿では概念を重視する学習を学習指導要領に基づく教育実践に取り入れ得るのかについて論じる。

本稿で扱う IB の教科は、16 歳から 19 歳までの生徒を対象とする DP の言語 A である。言語 A とは IBDP で母語教育を行うグループ 1 の教科のうち「言語 A：文学」「言語 A：言語と文学」のことを言う。グループ 1 には「言語 A：文学」「言語 A：言語と文学」「文学と演劇」の 3 科目があるが、日本語での指導が認められているのは、「言語 A：文学」「言語 A：言語と文学」の 2 科目のみである。また 2019 年に改訂された言語 A カリキュラムでは教科のなかで使用が推奨される概念として「アイデンティティ」「文化」「創造性」「コミュニケーション」「観点」「変換」「表現」が指定されており、この 7 つの概念を核とした授業展開が想定されている。したがって本稿では言語 A を取り上げることとする。

本稿が IB 教育における概念を重視した学習を研究対

象とする意義は次のとおりである。IB 教育は生徒が「個人が理解したことを伝え、協働で意味を構築」し、「今後の学習や学校の枠をこえた人生で成功するために活用できる」学習を重視している (IBO, 2014=2018, p.18)。それゆえに IB 教育では概念を重視した教育を実施することが求められている。一方で、新学習指導要領で明示された「言語能力」も思考の整理や表現だけではなく、学級での協働作業にも不可欠な資質・能力とされている。さらにこの資質・能力は生涯にわたる学びの基盤となるため、学校教育での育成が求められている (文部科学省, 2018a)。

このように IB 教育の概念を重視する学習と学習指導要領における「言語能力」とはその位置付けや目的に共通する部分がある。したがって本稿では、学習指導要領改訂に際して議論された「言語能力を構成する資質・能力」と IB 教育における概念を重視する教育が目指すものとの対応関係があるか否かを確認するとともに、IBDP 言語 A で指定されている 7 つの概念を国語科の必修科目である「現代の国語」及び「言語文化」で用いることが言語能力を育成に寄与する可能性につながるか、また 7 つの概念を国語科の必修科目で用いる際の課題とはいかなるものかについて論じる。

なお本稿では IBDP 言語 A については IBO により刊行され、文部科学省が日本語訳を監修した『DP: 原則から実践へ』(IBO, 2014=2020)、『「言語 A: 文学」指導の手引き 2021 年第一回試験』(IBO, 2019=2019) を中心に分析を行う。新学習指導要領の「言語能力」に関しては「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめについて (報告)」(文部科学省, 2016) を主に参照する。また「現代の国語」及び「言語文化」の分析については『高等学校指導要領 (平成 30 年告示) 解説国語編』(文部科学省, 2018b) を主に用いる。

最後に本稿の構成について述べる。第 2 節において新学習指導要領の改訂過程の議論で「言語能力」がいかに整理されたかについて論じる。第 3 節では IBDP 言語 A における概念重視のカリキュラムの特徴について述べる。第 4 節では「現代の国語」及び「言語文化」で 7 つの概念を用いる可能性と課題について考察する。第 5 節では本稿をまとめ、及び本稿の限界と課題

を述べる。

2. 新学習指導要領における「言語能力」

PISA2003 の調査結果公表以降、「読解力向上プログラム」や「読解力向上に関する指導資料」の公表、「言語力育成協力者会議」の設置、2008・2009 年 (平成 20・21 年) 学習指導要領における言語に関する能力の育成の重視など、読解力の向上や言語活動の充実が重視されてきた。こうしたなかで新学習指導要領では言語能力の育成が目指された (文部科学省初等中等教育局教育課程課, 2018)。

『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説総則編』「学習の基盤となる資質・能力」(第 1 章総則第 2 款 2 (1)) では言語能力とは情報モラルも含めた言語活用能力や問題発見・解決能力と同じように、学習の基盤となる資質・能力とされ、各教科・科目の特質を生かし、教科横断的な視点から育成を図ることとされている。なかでも国語科は言葉そのものを学習対象にするということから言語能力の育成について大きな役割が期待されている (文部科学省, 2018a)。

次に言語能力の詳細を 2016 年 (平成 28 年) より中央教育審議会の「言語能力の向上に関する特別チーム」で行われた議論より確認する。

「言語能力の向上に関する特別チーム」は言語能力を「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」という新学習指導要領で示された三つの柱で整理している (表 1)。そのうち「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」の内容を見ると、「知識・技能」には言葉の働きや特徴そして使い方に関する事項、そして言語文化に関する事項が分類されている。従来「伝統的な思考文化と国語の特質に関する事項」とされていた事項の多くが「知識・技能」に置かれている。

また「思考力・判断力・表現力等」には「テキスト (情報) を理解したり、文章や発話により表現したりするための力」がおかれ、従来の「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の内容が「思考力・判断力・表現力等」に分類されている。さらに「思考

力・判断力・表現力等」では「考えの形成・深化」についても検討が加えられていること、あるいは「創造的・論理的思考の側面」、「感性・情緒の側面」、「他者とのコミュニケーションの側面」という三つの側面に分けて、言語能力について分析した過程も確認ができる。「学びに向かう力・人間性等」については言語能力を構成する資質・能力が働く原動力と位置付けられ、自覚や態度に関する事項が置かれている（文部科学省，2016）。このように国語科において言語能力をいかに

に育成するかが整理された。大滝（2018）によると、こうした整理がベースとなって国語科の改訂作業が進められた。

次節ではIB教育のうち、国語と同じく母語教育を行う言語Aにおいて、いかに概念を重視した教育を行おうとしているかについて論じる。

表 1 言語能力を構成する資質・能力

出所：文部科学省，2016より筆者作成

| 知識・技能 | 思考力・判断力・表現力等 | 学びに向かう力・人間性等 |
|--|--|--|
| <p>○言葉の働きや役割に関する理解</p> <p>○言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音声、話し言葉 ・文字、書き言葉 ・言葉の位相（地域や世代、相手や場面等による言葉の違いや変容） ・語、語句、語彙 ・文の成分、文の構成 ・文章の構造（文と文の関係、段落、段落と文章の関係）など <p>○言葉の使い方に関する理解と使い分け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し方、書き方、表現の工夫 ・聞き方、読み方など <p>○言語文化に関する理解</p> <p>○既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解</p> | <p>テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力</p> <p>【創造的・論理的思考の側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢情報を多面的・多角的に精査し、構造化する力 ・推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化 ・論理（情報と情報の関係性：共通－相違、原因－結果、具体－抽象等）の吟味・構築 ・妥当性、信頼性等の吟味 <p>➢構成・表現形式を評価する力</p> <p>【感性・情緒の側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力 <p>➢構成・表現形式を評価する力</p> <p>【他者とのコミュニケーションの側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢言葉を通じて伝え合う力 ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解・自分の意思や主張の伝達 ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り <p>➢構成・表現形式を評価する力</p> <p>《考えの形成・深化》</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢考えを形成し深める力 ・情報を編集・操作する力 ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力 | <ul style="list-style-type: none"> ・言葉が持つ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度 ・言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団としての考えを発展・深化させようとする態度 ・様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通じて、心を豊かにしようとする態度 ・言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度 ・自分の感情をコントロールして学びに向かう態度 ・歴史の中で創造され、継承されてきた言語文化の担い手としての自覚 |

3. IBDP 言語 A における概念理解

本節では IBDP 言語 A における概念重視のカリキュラムの特徴について述べる。

IBDP における指導と学習についての指針を示す『DP：原則から実践へ』（IBO, 2014=2020）によると IBDP では以下の理由から概念を用いた学習が推奨されている。

- ・事実を概念や本質的な概念的理解と関連づけるため、より深い知的レベルで事実に知識を処理する。この相乗的思考(事実と概念的思考の相互作用)は、事実と概念の2つのレベルで知性を結びつける。相乗的思考はより深い思考的処理を必要とするため、事実の知識が保持される割合は高まる。
- ・新たな知識を既存の知識と関連づけることにより、私的な関連性をつくる。また、知識の転移を通じてグローバルな文脈にわたって文化と環境についての理解を育む。
- ・学習意欲を高めるため、単元のトピックに個人的な焦点をあてつつ概念を使用し、自分ならではの知性を学習に適用する。 [15]
- ・事実に基づく情報を用いて深いレベルの概念理解を説明するとともにそれを裏づけることができるよう、言語の使用能力を高める。 [16]
- ・批判的、創造的、および概念的思考のレベルを向上させる。生徒は温暖化、国際紛争や世界経済など複雑なグローバルの課題を分析し、教科特有の概念学習を通じて科目をより掘り下げる。

(IBO, 2014=2020, pp.92-93)

このように DP では学習者個人の認識や経験に基づいた事象の把握と意味づけが重視される。その際に概念を用いる点に IBDP で行われる教育の特徴がある。

次に 2019 年に改訂された IBDP 言語 A カリキュラムにおける概念のあり方について述べる。言語 A の学習モデルには言語 A の三つのコース、主な学習トピック、主要概念との関係、そしてそれらが IBDP の核をな

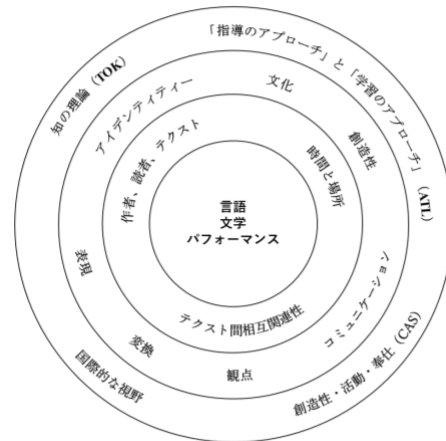


図 1 言語 A の学習モデル

出所：IBO, 2019=2019, p. 22 より筆者作成

す原理といかに関連しているかが表されている（図 1）。

図 1 の円の中心に置かれている「言語／文学／パフォーマンス」は科目を表している。その次の「作者、読者、テキスト」「時間と場所」「テキスト間相互関連性」は 2019 年版言語 A であらたに示された探究領域である。2019 年版言語 A カリキュラムでは生徒の探究が三つのどの領域で行われるものかを確かにすることが求められている。概念重視の学習との関連で言うと、探究領域に固有の概念的な問いを生徒に考えさせることで、教科に対して意識的に取り組めるように考えられている。

次の「アイデンティティ」「文化」「創造性」「コミュニケーション」「観点」「変換」「表現」と記されている部分は言語 A で使用が推奨されている概念を表している。

この 7 つの概念は指導と学習が常に立ち戻る場所であり、コースで扱われるものから社会に存在するものまで、多様なテキストや問題に対する生徒の理解を助け、コース全体にまたがる理論的道筋を形成するものだとされる。教師がいかに関連を生徒の理解を導くか、その方向性を示すのがカリキュラムに示された 7 つの概念である。

なお DP の評価は外部評価と内部評価の 2 種類がある。概念理解に関して言及されているものは外部評価の試験問題 2 と Higher Level（以下、HL）の小論文であ

る。試験問題2では学習した作品、コースの探究領域、コースの主要概念を結ぶつながりを探究し、作品を学習する際に使うことのできる複数の視点と、それらにより導かれる小論文の設問についての認識を深めることが求められる。また HL 小論文では学習者が学習を振り返りながら探究を行なっていく過程で、さまざまな観点から多くの作品について研究していく。そのなかで、どのトピックについて書くかを決定していくが、この際に7つの主要概念と照らし合わせてトピックを作ることができる。

次にこうした IB 教育の概念理解が言語能力の育成にいかに関与するのかを確認する。

4. IBDP 言語 A の概念理解を応用する可能性と課題

本節では高等学校必履修科目「現代の国語」および「言語文化」で IBDP 言語 A に示された7つの概念を使用した授業実践を行う可能性と課題を考察する。

まずは新学習指導要領で重視された「言語能力を構成する資質・能力」と IB 教育の概念理解の特徴との対応関係について論じる。

「言語能力を構成する資質・能力」と IBDP の概念理解との対応を示すと次のようになる（表2）。

表 2 国語科の言語能力を構成する資質・能力と
IBDP の概念理解との対応

| IBDP の概念理解 | 「言語能力を構成する資質・能力」 |
|-------------------------------------|--|
| ・より深い知的レベルで事実的な知識を処理する。 | 《考えの形成・深化》 |
| ・新たな知識を既存の知識と関連づけることにより、私的な関連性をつくる。 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 考えを形成し深める力 ・情報を編集・操作する力 ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力 |
| ・学習意欲を高めるため、単元のトピックに個人的な焦点をあてる。 | <p>【感性・情緒の側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力 ▶ 構成・表現形式を評価する力 <p>【他者とのコミュニケーションの側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 言葉を通じて伝え合う力 |

| | |
|---------------|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解・自分の意思や主張の伝達 ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り |
| ・言語の使用能力を高める。 | テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力 |

出所：IBO, 2014=2020, 文部科学省, 2016 より筆者作成

表2に示したように、IBDP の概念理解に挙げられた「より深い知的レベルで事実的な知識を処理する」という項目は言語能力を構成する資質・能力における「考えの形成・深化」と対応する。また概念理解の「新たな知識を既存の知識と関連づけることにより、私的な関連性をつくる」や「学習意欲を高めるため、単元のトピックに個人的な焦点をあてる」という項目は言語能力の「新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力」や「言葉を通じて伝え合う力」と対応する。さらに IBDP の概念理解で挙げられた「言語の使用能力」は「テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力」と対応関係がある。

その一方で「知識の転移を通じてグローバルな文脈にわたって文化と環境についての理解を育む」「生徒は温暖化、国際紛争や世界経済など複雑なグローバルの課題を分析し、教科特有の概念学習を通じて科目をより掘り下げる」といった「グローバルな文脈」に関わる要素については「言語能力を構成する資質・能力」に直接の対応事項を見出すことはできない。

しかし『2018年（平成30年）告示高等学校学習指導要領解説 国語編』『国語科の目標』（第1章総説第3節1）では「生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにすること」が教科の目標とされるとともに「生涯にわたる社会生活」とは「高校生が日常関わる社会に限らず、現実の社会そのものである実社会を中心としながら、生涯にわたり他者や社会と関わっていく社会生活全般を指している」とされる。そして国語科において取り上げられる文化や環境あるいは温暖化や国際紛争や世界経済などの話題は IB 教育では「グローバルな文脈」として扱われる。こうしたことから IB 教育における「グローバルな文脈」の問題関心は新学習指導要領においても一部共

有されていると言える。

次に言語 A の 7 つの概念と 2018 年（平成 30 年）告示高等学校学習指導要領国語科の必履修科目である「現代の国語」と「言語文化」の「思考力、判断力、表現力等」の指導事項とを比較すると以下の通りとなる（表 3）。

7 つの概念のうち、「表現」や「コミュニケーション」とは言語活動そのものと関わっているため、「現代の国語」と「言語文化」の指導事項との間に共通点を認めることができる。また「現代の国語」の指導事項「A 話すこと・聞くこと」で「自分の考え」や「自分の立場」を相手に伝えたり、広げたり、深めたりすること等から「アイデンティティ」との関係も明確である。さらに「文化」についても「言語文化」の「文化に関する題材を選んで、随筆などを書いたりする活動」等で対応事項を見出すことができる。「創造性」や「観点」「変換」も含めると、7 つの概念全てに「現代の国語」または「言語文化」指導事項との間で対応する事柄を見出すことができる。

表 3 2018 年（平成 30 年）告示高等学校学習指導要領国語科と DP 言語 A の 7 つの概念との対応

| 言語 A | 学習指導要領 |
|----------|---|
| アイデンティティ | <p>自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にするとともに、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫すること。</p> <p>（「現代の国語」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 A、(1)、イ）</p> <p>論理の展開を予想しながら聞き、話の内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価するとともに、聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること。</p> <p>（「現代の国語」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 A、(1)、エ）</p> <p>自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに、文章の種類や、文体、語句などの表現の仕方を工夫すること。</p> <p>（「現代の国語」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 B、(1)、ウ）</p> <p>目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、</p> |

| | |
|-----------|---|
| | <p>自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。</p> <p>（「現代の国語」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 B、(1)、エ）</p> |
| 文化 | <p>作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。</p> <p>（「言語文化」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 B、(1)、オ）</p> |
| 創造性 | <p>自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にすること。</p> <p>（「言語文化」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 A、(1)、ア）</p> <p>自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫すること。</p> <p>（「言語文化」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 A、(1)、イ）</p> |
| コミュニケーション | 指導事項の全ての項目 |
| 観点 | <p>作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。</p> <p>（「言語文化」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 B、(1)、イ）</p> |
| 変換 | <p>自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にするとともに、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫すること。</p> <p>（「現代の国語」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 A、(1)、イ）</p> <p>話し言葉の特徴を踏まえて話したり、場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど、相手の理解が得られるように表現を工夫すること。</p> <p>（「現代の国語」〔思考力、判断力、表現力等〕指導事項 A、(1)、ウ）</p> |
| 表現 | 指導事項の全ての項目 |

出所：IBO, 2019=2019, 文部科学省, 2018 より筆者作成。
下線引用者。

新学習指導要領では言語能力の育成に概念重視の学習が寄与することも、また具体的にいかなる概念を用いて「現代の国語」や「言語文化」で授業を実施するかも明示されていない。ただし IB 教育で実践されている概念重視の学習でねらいとすることは、国語科における

言語能力の育成と共通するところがある。また「現代の国語」及び「言語文化」の指導事項と IBDP 言語 A カリキュラムとを比較すると、IBDP 言語 A に示された 7 つの概念と共通する要素を指導事項で確認できる。以上より、言語能力を育成するために IBDP 言語 A の 7 つの概念を用いた授業実践を「現代の国語」や「言語文化」で行うことは可能であると言える。

ただし IBDP 言語 A の 7 つの概念を用いた授業実践が必ずしも言語能力の育成に繋がるわけではないことも併せて理解する必要がある。その理由は、2018 年（平成 30 年）告示高等学校学習指導要領国語科と言語 A との相違点と関係する。

「現代の国語」や「言語文化」では指導事項が明確であり、授業展開に直接資するように記述されている。それと比較すると IBDP 言語 A の 7 つの概念はそれぞれを用いていかなる指導を行うかが明確ではない。言い換えるならば、言語 A で明示されている 7 つの概念はより多くの指導内容を包含する位置付けとなっている。

したがって言語能力の育成を図るねらいを持っていたとしても、IBDP 言語 A の 7 つの概念をいかに用いるかについては授業実施者によって大きく異なることが予想される。

だからこそ IBDP 言語 A カリキュラムに予め明示された概念を国語科の授業で用いる場合、まずは IBDP 言語 A の好事例に関する分析が必要となる。また IBDP 言語 A の好事例を国語科で応用し、言語能力の向上に資するようにするには、IBDP 言語 A を指導している教師の 7 つの概念に関する信念、あるいはクラスの生徒数や単元あたりの時数そして単元評価の方法といった授業を構成する要素についても調査が必要になる。

IB 教育の概念理解の好事例を支える環境を調査することは、好事例を応用する側の検討も促すことになると考えられる。すなわち授業を応用するにあたって教師が生徒の探究学習を補助するのに適切なクラス人数であるのか、授業時数を確保することはできるのか、また評価方法をいかにするのか。こうした授業構成要素についても検討した上で、IBDP 言語 A の実践好事例を国語科でも実施することで、言語能力の育成が実現できると考えられる。

5. おわりに

本稿では新学習指導要領で育成すべきとされた言語能力を育成するうえで、IBDP 言語 A における概念重視の授業実践が寄与する可能性と課題を論じた。IBDP 言語 A の 7 つの概念を用いた国語科での授業実践は言語能力の育成にも寄与し、2018 年（平成 30 年）告示高等学校学習指導要領国語科における「現代の国語」「言語文化」の授業で実践できる可能性がある。その一方で、学習指導要領の指導事項と比べて、IBDP 言語 A における 7 つの概念をいかに用いるかについては具体的に明記されていない。したがって、好事例を応用する教師や学校、教室の状況によっては 7 つの概念を用いても言語能力の向上に繋がらないという問題が生じうることを述べた。

本稿が示唆するのは、言語能力を向上させるために IBDP 言語 A の授業を応用する際には、応用する側に実践好事例に関する広範な理解と実践上の配慮が必要となるということである。

ただし本稿では学習指導要領にもとづいて行われる日本の教育と IB 教育の間で、後期中等教育段階までのプログラムでいかなる差異があるかについて論じてはいない。学習指導要領に基づく教育と IB 教育との教育制度や教育内容の差異を明確にすることによって、双方を比較参照する意義がより明確になると考えられる。

また本稿では IBDP 言語 A で 7 つの概念を用いた授業を実践する教師が 7 つの概念をいかに理解し、その理解にもとづいていかに 7 つの概念を応用しているか論じることができていない。また IBDP 言語 A の実践好事例を国語科の授業で実践する条件を整えるために、教師が行う創意工夫についても明らかにしてはいない。こうした IBDP 言語 A の好事例に関する教師の実態に関する調査についても今後の課題とする。

<参考文献>

International Baccalaureate Organization, 2014, DP:
From principles into practice, International

- Baccalaureate Organization, (=2020 『DP：原則から実践へ』 国際バカロレア機構) .
- International Baccalaureate Organization, 2014, MYP: From principles into practice, International Baccalaureate Organization, (=2018 『MYP：原則から実践へ』 国際バカロレア機構) .
- International Baccalaureate Organization, 2019, Language A: literature guide, International Baccalaureate Organization, (=2019 『「言語 A：文学」指導の手引き 2021 年第一回試験』 国際バカロレア機構) .
- 文部科学省, 2016, 「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめについて (報告)」, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyoyo3/056/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377098.pdf 2022 年 6 月 30 日閲覧.
- 文部科学省, 2018a, 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説総則編』 東洋館出版社.
- 文部科学省, 2018b, 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説国語編』 東洋館出版社.
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課, 2018, 「言語能力の育成に向けてー新学習指導要領における改善・充実ー」『情報の科学と技術』 68 巻第 8 号, pp.395-399.
- 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム, 2022, 「IB とは」, <https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/> 2022 年 6 月 30 日閲覧.
- 中村純子, 2019, 「国際バカロレアが目指す概念理解と国語科での指導の可能性：IB 言語 A PYP・MYP・DP のカリキュラム分析から」『東京学芸大学国語教育学会研究紀要』 15 巻, pp.20-29.
- 大迫弘和, 2016, 『アクティブ・ラーニングとしての国際バカロレアー「覚える君」から「考える君」へー』 日本標準.
- 大滝一登, 2018, 『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 理論編』 明治書院.
- 白井俊, 2020, 『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来ーエージェンシー、資質・能力とカリキュラムー』 ミネルヴァ書房.